

オーストラリアの地理教育、グローバル教育、EfS教育を考える — シティズンシップ教育の視点から —

酒井喜八郎

南九州大学 社会科教育・教育方法学研究室

In Australia, How do Geography Education, Global Education, and EfS Education Foster citizenship?

Kihachiro Sakai

キーワード：オーストラリア、グローバル教育、EfS教育、
シティズンシップ教育、コモングッツ

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of Geography education, Global education, and Education for Sustainability(EfS education) from the perspective of citizenship education.

As a result of this analysis, my findings are as follows.

First of all, global education in Australia mainly used the original curriculum of each school but centered it on language and culture recently.

Its content includes not only environmental education, as the author initially believed, but also multi-cultural education, peace education, and human rights education , which extends through entire citizenship education curriculum.

Importantly, I concluded that the reason for this is Australia's geographical location, its recent acceptance of many immigrants from Asia, and as well as its recognition of Indigenous Australians, etc.

The geographic accessibility of Australia to Asia and Africa has shaped the country's global citizenship education.

Secondly, Australia also developed its citizenship education program based on community and regional discussions.

In Melbourne, many environmental parks, facilities, tourism education programs, and primary school events, feature group discussions between young generation and politicians. In other words, they place an emphasis on the connection between nature and society from the perspective of EfS.

Thirdly, Australia's emphasis on local and global citizenship for students was influenced by the Declaration of Melbourne in 2008. The foundation of citizenship education in Australia is a way of thinking about common good first espoused by Aristotle in ancient Greece.

Key word:Australia, Geography education, Global education, Education for Sustainability, Citizenship education

I はじめに

1 研究の目的

平成29年3月に公示された日本の新学習指導要領では、資質・能力の育成が重視されている。一方、オーストラリアでは、汎用的能力の育成が重視され、新ナ

ショナルカリキュラムが作成され、同様にコンピテンシー・ベースの教育が実施されている。これまで、筆者は、新ナショナルカリキュラムのもとでのオーストラリアの社会科教育を、ESD (Education for Sustainable Development) の視点¹や、シティズンシップ教育の視点から分析検討してきた(酒井2015a, 酒井2017a)。酒井(2015a)²では、ビクトリア州のメルボルンを中

心にESD教育の分析を行っており、酒井（2017a）においては、新しいナショナルカリキュラムの浸透度の高いクイーンズランド州の公民とシティズンシップ教育の分析を行っている³。また、酒井（2017b）において、ESDの視点からの社会科授業開発も行っている⁴。

オーストラリアのシティズンシップ教育の視点からの先行研究には、見世（2010⁵、2013⁶）があり、その特質を整理しているが、ナショナルカリキュラム以前のビクトリア州のカリキュラム分析が中心で、論文で述べられているように具体的にどのように展開されているかという課題が残されている⁷。

一方、オーストラリア国内でも、オーストラリアのシティズンシップ教育の研究がモナシュ大学のLibby Tudballやシドニー大学のMurray Printらによって推進されている。特に、タスマニア大学のPeter Brett（2017）が、EfS教育（オーストラリアではESDというよりもEfS（Education for Sustainability）というのが一般的）とシティズンシップ教育の関連の重要性を指摘しており⁸、オーストラリアの地理教育、グローバル教育とEfS教育の特質は、シティズンシップ育成の視点から、具体的なリソース教材や実践例の分析を通してさらに明らかにする必要がある。

オーストラリアのグローバル教育については、木村（2014）が開発教育からの流れを述べているが⁹、オーストラリアナショナルカリキュラムのもとで、グローバル教育やEfS教育が、シティズンシップ教育とのかかわりでどのように実践され、どのような特質があるかは充分明らかにされていない。また、地理教育関係では多文化教育について言及した山本（1991）¹⁰、最近では、ESDの視点から、永田（2010¹¹、2011¹²）の研究があるが、ナショナルカリキュラムが作成される以前の教科書の分析が中心である。

そこで、本研究では、2008年のメルボルン宣言以降からナショナルカリキュラムが浸透しつつある現在まで、オーストラリア全体で、地理教育がどのようにシティズンシップ教育との関連で行われているのか、また、隣接するグローバル教育やEfS教育がどのようにシティズンシップ教育との関連で行われているのか、教科書はもちろん、全豪の先進校の実践をまとめた事例集や環境への取り組みなどを総合的に分析して、それぞれの特質とその背景や根底にあるものを明らかにしたいと考える。

これは、わが国の公民的資質の育成を目標とする社会科を考える上でも意義がある。

2 研究方法

研究方法は以下のとおりである。

(1) オーストラリアのグローバル教育の実践事例集（Libby Tudball & Lindy Stirling（2011）*Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia*, Monash University Education, World Vision Australia, 74p.）の内容を分析する¹³。

(2) オーストラリアのグローバル教育を推進するESA Education Services Australia（オーストラリア教育サービス）のLen Vanessa氏に、グローバル教育についてインタビュー調査する。（2018年7月12日：ESAオフィス、

メルボルンで1時間にわたって実施）

(3) オーストラリアの小学校と中学校のリソース教材としての地理教科書の内容を分析し地理教育の現状を明らかにする。

(4) オーストラリアの環境教育施設や環境プログラムを見学し内容をインタビュー調査する。（2018年7月14日ブリスベン プーンダルウエットランド自然保護センターで実施）

(5) Aussiの活動と、主体的な若者の活動はホームページの内容を分析する。

Ⅱ オーストラリアの地理教科書（リソース教材）のシティズンシップ育成の視点からの内容分析

1 オーストラリアの小学校地理教科書の内容分析

オーストラリアの小学校地理教科書の中には市民性を育成するために、身近な生活からグローバルな 이슈を取り扱うリソース教材もある。この小学校地理教科書は、Stephen Scoffham（Visiting Reader in Sustainability and Education Canterbury Christ Church University）というイギリスの地理学者によって執筆されている¹⁴。オーストラリアでは、リソース教材としてどの教科書を活用すればよいかという規制はない。この教科書は身近な社会問題を扱いながら、コンピテンシー・ベースに作成されている。地球から水、気候など自然地理だけでなく、オーストラリアはもちろんシンガポールなどアジアの人文地理や世界で起こる問題も取りあげられている。例えば、小学校6年の地理では、惑星地球、水、気候、居住、仕事と旅行、環境、場所の7つの 이슈があり、ヨーロッパ、南アメリカ、シンガポールも対象地域として取り扱われていた。特に、オーストラリアのナショナルカリキュラムではアジアについて必須領域（プライオリティ）として学ぶようになっている。

具体的に人々にとって大切な「水」の単位について、この教科書の記述内容を分析してみよう。表1から表4が、水の単元の2頁内に一覧できるように記述されている¹⁵。

表1 本文の内容（表1～表4 筆者訳出して作成）

水を飲むこと
<レッスン1：水、至る所にある水>
・世界で水は充分あるのか？
・世界にはたくさんの量の水がある。しかしながら、その水のほとんどは、塩味の海水としてであり、飲み水に使用できない。私たちの新鮮な水資源は、川、湖、地下水である。新鮮な水は、工業用、農業用のみならず私たちの生活にとって本質的なものである。世界中には、人口増加による水の需要が起こっている。また人々はたくさんの機械を買うのでもっと水を使用する。これは水が資源として欠乏することを意味している。雨がほとんど降らない密集した地域では、この問題はもっと悪化する。

表2 キーワード

〈キーワード〉
・水たまり・ポンプステーション・貯水池・資源 ・水の仕事・井戸

表3 データバンク

〈キーワード〉
〈データバンク〉： ・世界の食料を成長させるために、1秒あたり世界の2兆リットルの水が必要である。 ・真水の70%が氷として南極に存在する。

このデータバンクの他、マップワーク（地図作業）のコーナーがあり、これらの資料をもとに、様々なイシュー（問題）について考える内容構成となっている。

表4 イシュー（問題）

イシュー
・水のしずくが落ちている蛇口は、1か月に700リットル以上の水を浪費している。 ・水道メーターは、水を節約するために、イギリスでは、多くの家で設置されてきた。 ・世界中で、人々は、水洗トイレよりもモバイル電話を持っている。

水に関する単元のイシューでは、水道の問題点について①から③の3つが挙げられている。①では、イギリスでは、平均1ヶ月に700リットルの水を浪費していること、②では、水道メーターが水の節約のために設置されていること、③では、水洗トイレよりもモバイル電話の所有率の方が世界全体で高いという興味深い問題が取りあげられている。つまり、表1の本文だけでなく、さらに表2のキーワード、表3のデータバンクや地図化のコラムがあり、これらをもとに、表4に示した問題を考える内容構成となっており、それぞれが関連し、知識理解だけでなくスキルを同時に重視し獲得させようとしていることが読み取れる。

オーストラリアの小学校地理教科書の分析をした結果、次のようなことがわかる。

第1に、イギリスの地理学者が書いた教科書が使われており、表1から表4の内容を分析してわかるように、単元名、本文の説明文、キーワードのコラム、データバンクのコラム、問題のコラム、というように、系統的に教科書が知識理解とスキルを同時に獲得できるように記述されている。特にこの社会科学教科書は新社会科学HASS (Humanities and Social Sciences) によくリンクし、ナショナルカリキュラムに対応した内容構成となっており示唆に富む¹⁶。

第2に、調査のコラムでは、地図で位置を確認したり、表現したりする頁があり、様々なアクティビティが用意されている。

第3に、イシュー問題がトピックとして取り扱われており、この問題を調査活動や地図化などの様々なア

クティビティを行いながら考えることをとおして、知識とスキルを同時に身に付ける内容構成になっている。

2 オーストラリアの中学校地理教科書（リソース教材）の内容分析

次の表5は、オーストラリアのNew South Wales州（以下NSW州）の中学校リソース教材としての地理教科書第9学年と10学年用の単元内容を分析考察したものである¹⁷。（オーストラリアでは教科書というより、リソース教材として活用される。）Pearson社は、オーストラリアの本屋で販売されており、シェアが高く、内容は系統地理である。この中学校教科書（リソース教材）の著者のDr.Grant Kleemanはオーストラリアの先導的な地理教育者であり、Australian Geography Teachers' Association Inc.の会長をしている。

教科書はパートAの「地理の探究とスキル」と、パートBの単元内容で構成されている。

表5 中学校教科書の分析 P社
（パートAの部分を筆者訳出して作成）

単元名	単元の内容
パート A	地理の探究とスキル
地理のツールとスキル	・探求的な問い
地形図を分析すること	・地形図を分析すること ・景観を読むこと
地形図マップで作業	・方位、勾配
流れ図	・グラフィック活用
写真の解釈：農業	・農業の種類・生産の規模
人口ピラミッド	・人口ピラミッドの活用 ・人口ピラミッドの解釈 ・オーストラリアとインドの人口ピラミッド

パートAでは、地理の基本的なツールとスキルを学ぶ。地形図の読み取りや流れ図、産業としての農業の解釈の仕方、人口ピラミッドの活用と解釈、その応用として、オーストラリアとインドの人口ピラミッドの比較を行っている。

例えば、オーストラリアとインドの人口ピラミッド (Population Pylamid) の比較のページを見てみよう¹⁸。ここでは、まず、人口ピラミッドについて詳しい説明が記述されている。次に、オーストラリアとインドの人口ピラミッドのグラフが示され、比較考察されている。

表6 発展課題（筆者訳出して作成、下線は筆者による）

知識と理解	人口ピラミッドの意味するものは何か述べよ。
スキル	・オーストラリアの1995年と2015年の15歳以下の年齢の人口比率を見積もりなさい。 ・ <u>インド</u> の人口比率を見積もりなさい。

スキル	・オーストラリアの1995年と2015年の64歳以上の年齢の人口比率を見積もりなさい。 ・インドの人口比率を見積もりなさい。
調査活動	・アフリカのどこかの国を選択して、人口ピラミッドを、アメリカの資料センサスを活用して自分で作成し、オーストラリアと比較考察しなさい。

表6のように、人口ピラミッドについて、解釈やスキルを学ぶだけでなく、実際に調査活動の課題があり、アフリカのどこかの国を選択して、人口ピラミッドを、アメリカの資料センサスを活用して自分で作成し、オーストラリアと比較考察する課題が出されており、コンピテンシー・ベースの内容構成であることがわかる。つまり課題の対象地域はオーストラリアだけではなくアフリカであり、活用する資料はアメリカの統計資料というように、グローバルに思考をめぐらす内容構成となっている。

また、IPCCの政策について考えさせる課題もあり、総じて高度な内容となっている。(IPCCとは、気候変動に関する政府間パネル Intergovernmental Panel on Climate Change, のことで、国際的な専門家で構成される地球温暖化の研究のための政府間機構である。)

また、パートBは、表7のような単元で構成されている。

表7 中学校地理教科書の内容構成
(パートBの部分を筆者訳出して作成)

単元名
・ 植生
・ エコシステムと植生
・ 植生の中でのエネルギーの流れ
・ 持続的な植生
・ 変化する場所
・ 植生のグローバルな分布
・ 世界の主な植生
・ オーストラリアの主なエコシステムと植生
・ 植生の生産性
・ エネルギー問題に関する生物多様性の衝撃
・ 環境の変化と維持
・ 環境変化の原因
・ 植生に対する人間の変更
・ 植生と食料の安全保障
・ 農業のグローバルパターン
・ オンラインの章
・ バンガニ川流域
・ タンザニア

プロジェクトの事例もやはり、オーストラリアではなく、アフリカのタンザニア・バンガニ川の流域総合的水資源管理が取りあげられており、気候変動・適応の考え方が見受けられ、高度な内容を取り扱っている。

このように中学校の地理教科書は、EISの視点から世界の川の水資源管理の問題などにも言及され幅広い内容となっている。また、農業のグローバルパターンについての記述もあり、中学校の地理教科書は、EISの視点からの自然地理の記述が目立つ。

オーストラリアの新社会科HASS (Humanities and Social Sciences) は、①知識・概念の理解②スキルを同時に目標としているが、ナショナルカリキュラム第9-10学年では、表8のような内容が要求されている。

表8 ナショナルカリキュラム第9-10学年の内容
(筆者訳出して作成)

- * Biomes and food security :
バイオームと食料の安全保障
- * Geographies of interconnections :
相互作用の地誌
- * Environmental change and management :
環境の変化と維持
- * Geographies of human wellbeing :
人類のウェルビーイングの地誌

オーストラリアのNSWの中学校地理教科書(リソース教材)は、応用的で、HASSのナショナルカリキュラムに準拠しながら、コンピテンシー・ベースで、系統地理の内容構成でESDの視点が組み込まれていた。

以上のように、小・中学校の地理教科書の内容分析から地理教育は、概念理解とスキルの獲得を通してシティズンシップの育成を目指していることがわかる。

Ⅲ オーストラリアのシティズンシップ 育成の視点からのグローバル教育

1 オーストラリアのグローバル教育の鍵領域

次に、オーストラリアのグローバル教育の内容を見よう。

表9はCalder & Smith (1993) によるグローバル教育の鍵概念を訳出したものである¹⁹。「知識と理解」、「スキルとプロセス」、「他者と関わろうとする意欲」という3つの項目に分類されている。オーストラリアは、以前から開発教育からの流れによるグローバル教育を行っていることに特徴がある。

生徒は、自己意識として、まず、家族、共同体、地域における自分の位置を知ることが要求される。

ここで注目したいのは、グローバル教育が、まず、地域、コミュニティから出発しているということである。

次に、生徒は社会スキルや政治スキルを発展させることが要求される。また社会に対して行動するだけでなく、行動することをリフレクションし評価することも、生徒には要求される。シティズンシップのカリキュラムは、「知識・理解」と「スキルの習得」の2つの側面に焦点が当てられている。①探求力と思考力②協同のスキル③分析力④コミュニケーションスキルが培

表9 グローバル教育と鍵領域
(Key Area of Global Education: Calder & Smith(1993)を筆者訳出)

知識と理解	スキルとプロセス	人と関わる意欲と行動
<自己意識>	<探究>	<人と関わる意志>
・生徒は家族、共同体、地域における自分の位置を知るべきである。	・生徒はどのように世界の問題を見つけ記録するかを考えるべきである。	・生徒は、人権、正義、民主主義に対してチャレンジしようとする意欲を持つべきである。
<他の人の文化>	<批判的思考>	<他の人を取るべき行動の確認>
・生徒は、考えの多様性と類似性を知るべきである。	・生徒は、量、関連、情報の優先順位を評価することができるべきである。生徒は事実と意見を区別するべきである。	・生徒はどのように調査するか知るべきである。
<パースペクティブの意識>	<コミュニケーション>	<好ましい成果を評価すること>
・生徒は、特定の見解を持つべきである。	・生徒は、いろいろな方法で自分の考えを説明することができるべきである。	・生徒は期待される成果に対する洞察力を持つべきである。
<地域内での不平等>	<意思決定と問題解決>	<個人的なコメント>
・生徒は世界の富と健康の不平等に気付くべきである。	・生徒は、事象の関連、妥当性、に比重を置くべきである。	・生徒は、特定の行動の選択をすることを要求するべきである。
<相互依存>	<社会スキル>	<適切な行動をとること>
・生徒は、経済的、生態的なつながりに気付くべきである。	・生徒は、社会的スキルの必要性を発展させるべきである。	・生徒はいかに行動をとるかを知るべきである。
<変化と発展>	<政治スキル>	<行動のプロセスと結果を評価すること>
・生徒は変化の原因に気付くべきである。	・生徒は、政治に参加する能力を持つべきである。	・生徒は行動をリフレクション(省察)する能力を持つべきである。

われるようになる。

知識理解だけでなく行動やそれらの評価までが明示されており、シティズンシップの育成を目指したものとなっている。また地域の富と不平等、相互依存、変化と発展に気づくことが期待されている。

2 グローバル教育と学力のこれまでの研究

木村(2014)は、ESDに関する資質能力を育成するために、自身の価値観や問題解決能力に向けた行動に参加するための技能などを身に付けながら問題解決に取り組むことが必要となるならば、ESD教育とグローバル教育は同じ方向を示していると述べる²⁰。これに付け加えるならばシティズンシップ教育も同様であり、全てを包括する目標と考える。ESDで重視する態度には、批判的に考える力、未来予測をする力、総合的に考える力、コミュニケーション力、他者との協力、つながりを大切にする、進んで参加する態度などがある。またESDの学び方として、関心の喚起、理解の深化、参加する態度や問題解決能力の育成、具体的な行動を促すという一連の流れに位置づけるとある。これは、オーストラリアのシティズンシップ教育の流れと合致している。

IV オーストラリアのグローバル教育の実践事例の分析 ～ 盛んな交流学習 ～

1 オーストラリアのグローバル教育の先進校の実践

事例

それでは、オーストラリアでの各学校での実際の具体的な実践はどうなっているだろうか。Tudball&Stirling(2011)によるオーストラリア全体のグローバル教育の実践事例集 *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia* から各州の主な特色ある実践を8事例抽出し、オーストラリアのグローバル教育の動向を整理して見てみよう²¹。

表10 オーストラリアのグローバル教育の著名校の実践事例
(Tudball & Stirling (2011) *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia* 74p.より
筆者訳出して作成)

オーストラリアの各学校のグローバル教育の取り組み事例
①YIRARA COLLEGE, NORTHERN TERRITORY州 (先住民学習に特徴)
(実践内容) ヤラカレッジでは、「先住民のコミュニティ」とともに学ぶ総合学習が特色で、「ミニチュアのグローバル村：アイデンティティと調和」というテーマで実践を行っている。
②INGLE FARM PRIMARY SCHOOL, SOUTH AUSTRALIA州 (人権学習やグローバル教育の学校全体のアプローチに特徴)
(実践内容) イングルフーム小学校は次のように紹介されている。「私たちは高い質のアカデミックな学び、個人の生徒をケアし、サポートする。南オー

オーストラリアでもユニークな特質があり、3つのセクターで構成されている。小学校のセクターは初等学校7年生までを受け入れる。集中英語プログラムがオーストラリアへ来たばかりの生徒に教えられる。2年までのコミュニケーション障害の受け入れと、知的障害の3年から7年までの生徒たちを世話する特別支援教育セクターがある。私たちは、教育プログラム、全ての国家、サービス、多文化コミュニティに対してコミットする。私たちは、私たちの文化、言語、体験の多様性が強み、高揚、知識の源であると信じている。イングルファーム小学校は、アデレードの北部郊外に位置し、現代的に構造化されたカリキュラムの源である。現代的な、ダイナミックで、先進的な教育実践をしている。私たちの生徒の多文化の本質は、学校内のコミュニティのセンスをほどよく高めることを可能にする。

③ADELAIDE HIGH SCHOOL, SOUTH AUSTRALIA州 (多言語教育に特徴)

(実践内容) 人権教育、グローバル教育に対して学校全体のアプローチがある。フランス語、イタリア語、ドイツ語、現代ギリシャ語、中国語、日本語、スペイン語などを学習する。43のエスニックグループがある。

④SWAN EDUCATION DISTRICT, WESTERN AUSTRALIA州 (カンボジアとの交流)

(実践内容) パースの北東、都市エリアに位置する。2006年にカンボジア政府との覚え書きを発展させる。カンボジアの最も貧困地域であるKampong Speu県のKong Piseiを校長が訪問し姉妹校の協定を結んだ後、さらにより遠い学校も参加するようになった。

⑤MT ST MICHAELS COLLEGE, QUEENSLAND 州 (人権教育)

ブリスベン南西部郊外に位置する。強い社会正義と平和教育を重視している。あらゆる面で人間の尊厳を重視しお互いに協力する。グローバル教育の総合学習や協同カリキュラムなどを実施している。

(実践内容) 1908年創立の南オーストラリアで最古の高等学校で、州の言語教育の特別指定校となっている。フランス語、イタリア語、ドイツ語、現代ギリシア語、日本語、スペイン語などがカリキュラムに入っている。英語が話せない背景を持つ生徒が全体の60%、43のエスニックグループがいる。カリキュラムの範囲内で、グローバルな見識を持つことが学校の長期目標である。

⑥ST LEONARDS COLLEGE, VICTORIA州

(実践内容) メルボルンに2つのキャンパスを持つ。強い社会正義と国際理解教育、地方のビクトリアカリキュラムだけでなく、ディプロマプログラムを

持つ。プログラムは、世界中の国際的な見識や理解を広げるのに計画されている。メルボルンを州都とするビクトリア州は多くの移民や難民を受け入れてきた地域であり、多文化化した社会に対応する教育がなされてきた。

⑦GRAYS POINT PUBLIC SCHOOL, NEW SOUTH WALES州

(実践内容) GRAYS POINT PUBLIC SCHOOLは、シドニー郊外南部にある。ロイヤルナショナルパークに隣接しており良い環境にある。一つの人々、一つの世界をハイライトにグローバリズムや相互依存について学んでいる。

⑧DON COLLEGE, TASMANIA州 (環境学習と評価に特徴)

(実践内容: コミュニティの行動を導く価値)
DON COLLEGEはタスマニアの市の近くのDON貯水池の中の森の中にある。「寛容、理解、尊敬、アイデンティティ」という価値に基礎を置いている。SOSE (Studies of Society & Environment: 社会と環境学習) がグローバルカリキュラムを発展させるために選ばれている。SOSEをクイーンズランドのカリキュラムアセスメントとレポートフレームワークを活用して実施している。「知識と理解、調査、話し合い、参加、リフレクション (省察)、地理・歴史・観光・宗教・オーストラリア・アジア・太平洋学習、哲学の学習を実施しており、グローバルな視点が強調されている。宗教と哲学の学習は、タイ (仏教) とインド (ヒンズー教) の姉妹校とスカイプで結んで授業を行っている。また、ホワイトボードを使用して相互に意見交換をしている。アジア教育基金助成を受けて、タイ、インド、中国、日本と姉妹校の関係を築いている。Civics and Citizenship教育は、オーストラリアカリキュラムのねらいに沿ってシークエンス (順序) が準備される。

2 グローバル教育実践事例の考察

以上のように、分析した8つのオーストラリアのそれぞれの学校は、①先住民学習、②人権学習や学校全体のアプローチ、③多言語教育、④カンボジアとの交流学習、⑤人権教育、⑥社会正義と国際理解、⑦グローバリズムと相互依存、⑧環境学習と評価、にそれぞれ特徴がある。各学校の取り組みを見てみると、学校が位置する地域性や児童生徒の実態を生かして、環境学習だけでなく、人権学習や社会正義の学習など多岐にわたる総合的な実践をしていることがわかる。また、特色のある実践として、先住民学習や、オーストラリアのアジアやアフリカに近いという地理的位置の近接性を生かしてユニークな交流学習などを行っている。日本の総合学習に近いグローバル教育は、子どもたちにグローバルな認識を涵養し、グローバルシティズンシップを育成するのに役立っていると考えられる。

3 ESA : Education Service Australia (オーストラリア教育サービス) での聞き取り

2018年7月12日、午前9時、ESA (オーストラリア教育サービス) のLen Vanessa氏を訪問し、ビクトリア州の教育の動向について1時間にわたり話を聞いた。インタビューによれば、ビクトリア州では、特に、最近、言語・文化教育が重視されている。特に、日本語やイタリア語など10カ国語から各学校で1カ国語選択して学ぶ言語文化のプロジェクトが発足する予定があるという。

見世 (2013)²² は、ビクトリア州が、歴史的に多く移民を受け入れてきたことからマルチカルチュラルグローバルシティズンシップ教育が盛んであると述べている。しかしながら、現在、ビクトリア州ではグローバル学習がやや下火になってきており、一方で言語と文化・歴史学習を強調するプロジェクトを立ち上げようとしている。また、新社会科HASS (Humanities and Social Sciences) はクロスカリキュラムを含み、優先的に学ぶ領域 (ナショナルプライオリティ) があり、Aboriginal Studiesでは先住民のアボリジニーの文化と歴史を学ぶことが強調されている。オーストラリアは、近年先住民や移民に対して寛容な政策をとっている。

V オーストラリアのEIS教育の環境施設・Aussiや若者たちの取り組みとシティズンシップ教育

最後に、オーストラリアのEIS教育の環境施設とAussi学校団体や若者たちの取り組みを考察する。

ナショナルカリキュラムの影響で屋外での参加型の授業が多くなってきている。オーストラリアのEIS教育を、(1) 環境教育施設、(2) Aussi (オーストラリアのEIS教育を中心に実践する学校の団体) の取り組み、(3) 若者の政治家との気候変動をテーマとした会議、のそれぞれの活動内容について見ていこう。

1 環境教育施設などを中心とした取り組み

まず、オーストラリアでは環境教育の施設が充実しており、たくさんの方が学校が利用している。

①Boondall Wetland Environment Center

Brisbane city of Council (クイーンズランド州ブリスベン)

ブリスベン郊外のブーンダルウエットランド湿地自然保護センターに出かけ教育に関してインタビュー調査を行った。(2018年7月14日実施)。ブリスベンでは飛行機上空から景観観察すると蛇行するクリークや湿地が見られる。聞き取り調査では、この自然保護センターに、週に3校くらいが訪れ、体験学習などのアクティビティや先住民のアボリジニーの歴史を学習したり野鳥が止まる木を植えたり巣箱を作ったりする。インタビューによれば、センターで用意されているプログラムには、やごの世話、水質を計る、かえると遊ぶ、新鮮な水に住むかめやざりがにと遊ぶなどの「クリーク発見」という参加型講座が人気であるという。渡り鳥や湿地の生き物について学習する。渡り鳥の観察場所も設置されている。ここは、日本の千葉県習志野市の湿地とも交流協定を結んでいるということである。こ

のオーストラリアの湿地から日本の千葉の湿地へ渡り鳥が行き来している。

②発電所を改造したパワーハウス博物館 (NSW州シドニー)

ここは、オーストラリアを支えてきた蒸気機関や水について体験学習を通して学ぶことができ、学校のアウトリーチ教育や家族での利用が多い。例えば、水のラボというコーナーでは、水質の汚染度により、水の中の生物が異なることを示す拡大顕微鏡のような装置があり、実際に見ることができる。

また、地球温暖化のメカニズムについて学ぶコーナーなどもある。学校の休暇を利用して、親子でこのような博物館にでかけて学ぶスタイルが一般的である。

③セレス環境公園 (ビクトリア州メルボルン)

セレス環境公園はメルボルン郊外に位置しており、学校の環境教育に活用されている。セレス環境公園の教育訓練グループのマネージャーのLorna Pettifer氏から渡されたセレス環境公園への来園者などの資料を表11に示す。

表11 セレス環境公園への来園者数等 (単位: 人)

見学: Excursion	57767
出前授業: Incursion	9255
グローバル: global	177
アウトリーチ: outreach	184338
訓練として: training	1624

表11のように、セレス環境公園を利用する学校は多い。出前授業も行っている。また、セレス環境公園は地域だけでなく、海外からも来園者がある。

④ペンギンパレード (ビクトリア州 フィリップ島)

ビクトリア州のフィリップ島では、ペンギンパレードと呼ばれる観光アトラクションが盛んである。このペンギンパレードについてEISの視点から考える。フィリップ島へはメルボルンからバスで約2時間である。途中で野生のカンガルーが飛び跳ねていく光景が見える。フィリップ島では、海岸でペンギンが海から寝床のコロニーに戻ってくるまで観光客はひたすら待つ。夕方から太陽が沈み真っ暗になり待つこと約2時間、海からペンギンが陸に上がって来るときは子どもたちだけでなく大人たちも感動がある。小さなフェアリーペンギンたちはコロニーと呼ばれる自分たちの巣に戻っていく。

⑤移民博物館 (ビクトリア州メルボルン)

移民博物館は、オーストラリアの移民の歴史を学ぶことができる。ここは、環境施設ではないが、特に、船や飛行機の技術の歴史とメルボルンの年代別の各国からの移民の増加との関連が、多文化教育の視点から興味深い。この移民博物館も学校教育プログラムを持っている。

以上見てきたようにどの施設も学校や地域の人々に

開かれている。

2 Aussi—Caulfield Primary小学校の取り組み例

Aussiとは、オーストラリアのEFS教育を中心に実践する学校の団体のことである。Aussiとは、Australian Sustainable Initiativeの略である。オージーと発音するので、オーストラリア人という意味もあり親しみもこめられている。

例えば表12のようにAussiの1つであるCaulfield Primary小学校のEFSの取り組みの紹介文の事例を見ても環境に対する意識がかなり高いことがうかがえる。

3 若者が運営するAYCCと政治家との会議

オーストラリアのメルボルンでは、AYCC (The Australian Youth Climate Coalition) というオーストラリアを横断し59,000人の若者で運営される組織が、なぜ地球温暖化問題が重要なのか等について、小学校で分科会や政治家と話し合う会議を開いている。²⁴特に、

表12 Caulfield Primary小学校の取り組み²³

①Environment Leadership：環境リーダーシップ

2009年に教師と親たちの積極的に環境活動をするための会が組織されました。The Resource Smart AuSSI Vic Program for Sustainable Schools.

②Biodiversity：生物多様性

ナショナルツリーデーの日には、100本以上の木を学区の近隣に植林しています。私たちの地元の豊かで繁栄している豊富な植物が植えられています。これを植える幼稚園の子どもたちは、Glenhuntly RoadとCaulfield South Shopping Centreに面した学校の前庭に30本の樹木と低木を植えました。各学校のクラスは、50の植林地に植林します。新しい植物を保護し、トカゲの生息地を拡大するために、伐採や岩石を家に持ち帰ります。日本語のイマージョン教育として、七夕に短冊に願いを書きました。生徒たちは全ての動物たちがよく生活できるようにしています。

③ごみなしランチ

私たちはごみなしランチの日に、プラスチックのごみを避けるようにしています。

④持続可能な生活

1. World Environment Day (2010)：世界環境デー

金のコインの寄付のために環境カラーの緑と青色の服を着るよう促進しました。またプラスチックバッグを避けるための野菜のショッピングバッグを装飾しました。

2. 菜園づくり

3. 学校まで歩くこと、サイクリング、かけっこ

4. 水の節約

水効率プロジェクトでオーストラリア政府のコミュニティグラントを獲得しました。

5. 展望

Caulfield Primary School は1870年代に設立されました。今後は次の140年、環境に優しい活動をしていきたいです。

2015年には、政治家のギラード首相なども参加して気候変動について若者と話し合いをしている²⁵。このように、EFS教育とシティズンシップ教育との結びつきを強める動きが見られる。

VI 考察

1 地理教育・グローバル教育・EFS教育のそれぞれの特質

これまでの内容分析からオーストラリアの地理教育、グローバル教育とEFS教育は、以下に示す3点が、シティズンシップ育成の原理であり、根底の考え方の特質であると結論づけることができる。

(1) 概念理解とスキルを同時に目指すリソース教材としての小・中学校地理教科書

第1に、小・中学校の地理教科書の内容分析から、それぞれの教科書がEFSの視点から概念理解とスキルの育成を同時に目指す内容構成になっていることが明らかになった。これまで日本でも概念理解は行われていたがスキルの育成においては充分ではなかった。資質・能力の育成を、わが国の新学習指導要領は重視しているの、その点で示唆に富む。

(2) 地域とグローバルシティズンシップの育成

第2に、オーストラリアのグローバル教育は、各学校ごとの実態に対応して言語・文化の学習を中心に独自のカリキュラムを実施している。その内容は、当初予想していたEFSとしての環境教育だけでなく、多文化教育、平和教育、人権教育などのシティズンシップ教育全てに及んでいる。この理由は、オーストラリアでは、近年アジア系移民が増加していること²⁶や、先住民への配慮等、多文化国家オーストラリアの地理的な位置が重要なポイントであると考えられる。オーストラリアのアジアとアフリカへの近接性から、グローバルなシティズンシップの形成を目指していると言える。

(3) アウトリーチの参加型環境教育プログラム

第3に、EFSの視点から、グローバルシティズンシップを育成する一方で、コミュニティや地域を大切にしたいシティズンシップ教育を行っている。酒井 (2015a)²⁷で述べたように、メルボルンでは、市場や公共施設に小学生の子どもたちが見学にフィールドワークしているのを温かい目で見守る市民の姿がある。例えば、幼稚園における森への遠足学習、小学校における廃棄物のリサイクルの授業、中学校が連帯して他校の生徒を集めての体験重視の環境学習について実践事例を挙げたが、今回、さらに、メルボルン郊外のCERES環境公園やフィリップ島のペンギンパレード、ブリスベン郊外のウエットランド自然保護センター、シドニーのパワーハウス博物館など、多くの学校の子どもたちを受け入れており、休日には親子でこれらの施設を訪れる姿が見られた。

このように環境やエネルギーを考える上で充実した公園や施設、観光教育プログラムなどが存在することや、Aussiなどの小学校のEFSに関する様々な取り組みやAYCCなどの若者の政治家との会議もあり、EFSの視点から<自然>や<社会>と<つながり>を構築

しながら、環境学習に取り組んでいることがわかる。モナシュ大学のLibby Tudball氏へのインタビューでも、オーストラリアのEfs教育は、自然や社会との<Connection: つながり>がキーワードであることが強調されていた。

2 それぞれの教育の根底にあるもの—メルボルン宣言(2008)とコモングッズ(公共善)の思想—

1の考察から、オーストラリアは国内のコミュニティや地域の学習を通してのローカルな視野と同時に、アジアの視野、さらにグローバルな視野からの行動的なシティズンシップを育成しようとしている。これは、2008年の国家教育指針であるメルボルン宣言の影響が大きいことがわかる。メルボルン宣言では、オーストラリアすべての若者が①成功した学習者②自信のある創造的な個人③活動的で教養のある市民になることを目指している。

そして、オーストラリアのシティズンシップ教育の根底には、コモングッズの考え方がある。2016年にブリスベンで開催されたSCEAA (Social and Citizenship Education Association Australia) 会議のテーマは<コモングッズ: Common Goods>であった。<コモングッズ>は「公共善」と訳することができる。

なぜ、オーストラリアのシティズンシップ教育は今、<コモングッズ>なのか。<コモングッズ>は「個人の善」よりも「社会全体への公益」を目指すものである。この理由として、オーストラリアには古くアリストテレスの思想が根底にありイギリスの思想と同様の特質があり、これが、行動的シティズンシップを目指す源であるといえる²⁸。

VII おわりに

これまで見てきたように、オーストラリアの現在の、地理教育、グローバル教育、Efs教育をシティズンシップ教育の視点から分析すると、<行動的シティズンシップ>、<コモングッズ>の2つのキーワードに集約できる。これは日本の社会科教育関係者にとっても多くの示唆を与えてくれる。

2015年9月、アジェンダ2030が設定され²⁹、ESDをさらに発展させたSDGs (Sustainable Development Goals) は、世界の若い人々の間でも関心が近年ますます高くなってきている³⁰。今後は、アジェンダ2030に向けた教育実践が日本でもオーストラリアでも行われていけよう。さらに、資質・能力を目指す日本と、同様に21世紀型学力の汎用的能力を目指すオーストラリアのシティズンシップを育成する社会系教育に関する交流が深まることを願う。

(謝辞) 本研究は、国土地理協会の研究助成の成果の1部である。オーストラリアのEfsやグローバル教育の資料収集では、モナシュ大学のLibby Tudball氏にはお世話になった。ここに感謝したい。

要約

オーストラリアの地理教育、グローバル教育、Efs教育をシティズンシップ育成の視点から分析考察した。

その結果、以下の3点が明らかになった。

第1に、オーストラリアのリソース教材としての地理教科書は、概念理解だけでなくスキルを重視し、コンペテンシー・ベースの内容構成となっている。

第2に、オーストラリアのグローバル教育は各学校ごとの実態に対応して言語・文化の学習を中心に独自のカリキュラムを実施している。その内容は、当初予想していたEfsとしての環境教育だけでなく、多文化教育、平和教育、人権教育などシティズンシップ教育全てに及んでいる。この理由は、オーストラリアが近年アジアの移民を受け入れていることや、先住民への配慮等、多文化国家オーストラリアの地理的な位置が重要なポイントであると結論づけられる。オーストラリアのアジアとアフリカへの近接性から、グローバルなシティズンシップを形成していると言える。

第3に、Efs教育は、コミュニティや地域を大切にしたいアウトリーチ型のシティズンシップ教育を行っている。環境やエネルギーを考える上で充実した公園や施設、観光教育プログラムなどが存在することや、Aussiなどの小学校のEfsに関する様々な取り組みやAYCCなどの若者の政治家との会議の取り組み等を通して行動的なシティズンシップを育成し、Efsから<自然>や<社会>と<つながり>を構築しながら環境学習を行っている。

オーストラリアのEfs教育は自然や社会とのConnection (つながり) がキーワードであり強弱点である。オーストラリアの行動的シティズンシップ教育の根底には、コモングッズとアリストテレスの思想がある。

<註>

1. オーストラリアでは、ESD教育というよりも、Efs教育というのが一般的で、ESDとほぼ同義である。一方、日本では、ESDの言葉が浸透しているので、本論文では、オーストラリアのEfs教育と限定して言う時はEfsを用いたが、わが国の先行研究や論文全体の記述ではESDを用いた。ESDは、Education for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されており、持続可能な社会を実現するための教育のことである。
2. 酒井喜八郎 (2015a) 「オーストラリアの環境教育: ESD教育とシティズンシップ教育の視点から」『地理教育研究』No.16, pp.25-30.
3. 酒井喜八郎 (2017a) 「オーストラリアの新社会科HASSの動向と特質—ナショナル・カリキュラムとクイーンズランド州の事例の分析から—」『教育方法学研究』No.43, 日本教育方法学会, pp.1-12.

- (国土地理協会学術研究助成による成果の1部)
4. 酒井喜八郎 (2017b) 「わが国の持続可能な林業を考える社会科授業設計－ESD・経済・経営の視点から」『南九州大学研究集録』No.47B, pp.9-22.
(南九州学園研究奨励費による成果の1部)
 5. 見世千賀子 (2010) 「多文化社会における市民性の教育に関する一考察:オーストラリア・ビクトリア州を事例として」『国際教育評論』No.7, pp.1-13.
 6. 見世千賀子 (2013) 「オーストラリアのシティズンシップ教育がめざすもの」『Voters』No.12, pp.18-19.
 7. *Ibid.* pp.18-19.
 8. Peter Brett (2017) Making Connections Between Civics and Citizenship and Education for Sustainability 'Civics and Citizenship Education In Australia' Edited by Andrew Peterson and Libby Tudball (2017) BLOOMSBURY ACADEMIC, pp.165-185.
 9. 木村裕 (2014) 『オーストラリアのグローバル教育の理論と実践－開発教育研究の警鐘と新たな展開－』東信堂, 258p.
 10. 山本友和(1991)「オーストラリアの社会科カリキュラムにおける多文化教育の視点」『上越教育大学研究紀要』Vol.10, No.2, pp.275-285.
 11. 永田成文 (2010) 「ESDの視点を導入した地理教育の授業構成 :オーストラリアNSW州中等地理を事例として」『社会科教育研究』No.109, pp.28-40.
 12. 永田成文 (2011) 「系統地理を基盤とした市民性を育成する地理教育の授業構成 :オーストラリアVIC州中等地理を事例として」『社会科研究』No.75, pp.41-50.
 13. Libby Tudball & Lindy Stirling (2011) *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia*, Monash University Education, World Vision Australia, 74p.
全豪の特色のあるグローバル教育の先進校の実践が把握できる貴重な資料。SCEAA会長 Libby Tudball氏より直接渡された。
 14. Stephen Scoffham (2014) *Primary Geography Pupil Book 6 Issues*, Colin Bridge, 64p.
 15. *Ibid.* pp.8-9.
 16. *op.cit.*3) pp.1-12.
 17. NSW州の中学校用のリソースとしての教科書で、**Grant Kleeman(2016) GEOGRAPHY NEW SOUTHWALES 9+10 Stage 5 student books**, PEARSON, 387p.
 18. *Ibid.*17) pp.16-17.
 19. Calder, M.& Smith, R. (1993) *A Better World for all : Developing Education For the Classroom*, Canberra : AusAiD, pp.19-21.
 20. 木村裕 (2013) 「オーストラリアのグローバル教育における教育評価実践の方策と課題 : 南オーストラリア州の高等学校での実践の分析を通して」『教育方法学研究』日本教育方法学会 No.38(0), pp.49-60.等で述べている。
 21. *op.cit.*13) pp.17-69.
オーストラリアのグローバル教育の各州、地域の学校での事例が掲載されている。
 22. *op.cit.*6) p.19.
 23. 学校紹介は、<http://caulfieldps.vic.edu.au/> (2019年1月8日閲覧確認)。
 24. 地球温暖化などへの取り組みは、<http://www.aycc.org.au/> (2019年1月8日閲覧確認)。
 25. ジュリア・ギラードはオーストラリアの第27代首相。労働党党首であった。
 26. オーストラリアに住む移民のうちアジア出身者の割合が40%に達し、初めて欧州勢(34%)を上回ったことが豪統計局が2016年8月に実施した国勢調査で分かった。
<https://www.nikkei.com/article/DGXLASGM27H7F-X20C17A6FF2000/> (2019年1月8日閲覧確認)。
 27. *op.cit.*2) pp.25-30.
 28. イギリスでは、近年、アリストテレスの考え方が、バーミンガム大学のジュビリーセンターを中心にキャラクター教育に活用されている。オーストラリアも同じ傾向が見られる。
 29. 2015年9月、ニューヨーク国連本部「国連持続可能な開発サミット」が開催され、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が作成された。17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs)」が掲げられた。
 30. 筆者は、2017年2月17日に、カナダのトロント郊外のKortright環境保全センターでCharles Hopkins氏(カナダ、ヨーク大学:1992年ブラジル・リオでの国連アジェンダ21の作成者)と、今後の世界のESDやSDGs教育について、半構造化インタビュー及びディスカッションを実施した。ここでは、ESDやSDGsを教えることのできる教師教育がこれからの重要な課題であることを話し合うことができた。